

一人ひとりの闇に光を見る

牧師 山本護

「見よ、兄弟が共に座っている。なんとという恵み、なんとという喜び(詩編 133:1)」。当たり前読んでいた詩人の言葉の前で、ふと立ちどまりました。兄弟が仲良く座っていることがそれほどの恵みや喜びなのでしょうか。思い巡らせると、原初に弟アベルを殺害した兄カイン(創世 4:8)、イスラエル諸部族の源流となるヤコブに殺意をいだく兄エサウ(27:41)、またヤコブの末息子ヨセフも兄たちに殺されかけます(37:18)。こうした兄弟が共に座っているのだから、なんとという恵み、なんとという喜び、になるのかもしれませんが。



『Mandarinebi／みかんの丘』というエストニアとグルジアの合作映画(2013年)を観ました。グルジアにあるアブハジア自治共和国の紛争のさなか、エストニア移民の粗末な家が舞台。一人住まいの老人はエストニア人、敵対するグルジア兵とチェチェンから来た傭兵の二人が戦闘で重傷を負って生き残り、老人に介抱されて回復するという筋立てです。複雑な民族事情が背景にあり、心理描写が絶妙ですが難解な映画ではありません。

回復しかけているグルジア兵とコーカサス人の傭兵とが、憎しみ漂うテーブルをはさんで静かに交わす言葉が印象的でした。「俺はキリスト教が好きだ(コーカサス人)」、「俺は異教徒を排斥しない(グルジア人)」。民族と国家による憎悪で突き動かされている二人の兵士の底に、詩編の響きを聴き取りました。「見よ、兄弟が共に座っている。なんとという恵み、なんとという喜び」。ああ、詩編の言葉、こういう緊張を伴った描写なのか。

この映画、安易なハッピーエンドではありませんが、何か微かな光を残して終わります。民族や国家という「我々文脈」で正義や対立を語るのではなく、ひとりの人間の闇に灯されている光を撮っているせいかもしれません。ウクライナを人道支援し、ロシア国内の反戦運動を応援することは大切ですが、それと同時に彼ら兄弟(戦争に携わる)一人ひとりの底に建てられている十字架を思い起こして祈りたい。

復活祭が過ぎ、教会の庭にさまざまな生命が溢れ出て来ました。今年も、生物多様性のために威勢のいい草を刈りはしますが、根は抜かずに萌え出るに任せたい。八ヶ岳教会の植生も「見よ、兄弟が共に座っている。なんとという恵み、なんとという喜び」。慎ましい庭の調和と世界の平和。祈っていると近景と遠景でひと重なりになっています。Ω